

多読と学校英語等を緊密に連携させる英語学習法の検討と提案

綾 皓二郎^{*1}

Email: aya.k2015h27@gmail.com

*1: みやぎインターカレッジコープ

◎Key Words 多読三原則, GR(Graded Readers), Jolly Phonetics & Grammar, 五文型

1. はじめに

この報告は、多読について「NPO 多読」や「SSS 多読」の手引き⁽¹⁾を検討し、英米の教育事情や他の学習法の調査と個人的な経験をまとめたものである。非専門家による検討・調査であり、誤りや誤解があることを恐れる。

2. 読者の権利と「多読三原則」

最初に、読者の権利と読書法を確認する。読者の権利として「飛ばし読みする、最後まで読まない、手あたり次第に何でも読む、あちこち拾い読みする」他がある⁽²⁾。読書法にはどの言語でも「多読：少読、直読：訳読、速読：遅読、粗読：精読、黙読：音読」の各二項から一つを選ぶ組合せがある。多読は、通常は直読、速読、粗読、黙読であるが、部分的に精読や音読もする。日本の英語教育での精読は、訳読を必須とする少読、遅読である。

多読は、大量の本を原語のまま直読直解することを長期間に亘って継続して初めて学習効果が得られる読書法である。ここで本には新聞や雑誌、レポートなどの資料を含む。この多読に「多読三原則」⁽³⁾が唱えられている：①辞書は引かない、②わからないところは飛ばす、③合わないと思ったら投げる。そこで、①により分からない単語が出てきても辞書は引かない、②により分からないところは推理さえしないで単に飛ばして先に進み、③により面白くなければ途中で止めて次の本を選んでよいとする。こうすれば、読むハードルを大きく下げて、多読を長続きさせることが可能となる。多読三原則では本の内容の完璧な理解は目指さない。①②からおおよそ 70～80% 分かれれば、次の本に進んでよいとされているようである。②の読み飛ばしは、分からない箇所を何らかの方法で、時間がかからない範囲で、推測するのが普通のやり方である。なお②③が行き過ぎると、達成感（読めた！という成功体験）が得られない恐れがある。

以下では、英語多読について検討する。

3. 英語多読の目的と到達目標

多読の目的は、楽しみや情報を得ることに加えて、当該言語の理解能力を獲得することである。学校英語教育の目的は「母語に対する気づきの発達を支援し、母語を効果的に運用できる力を増進させることにある」⁽⁴⁾という主張がある。しかし、英語教育で英語力の獲得についての言及がないのでは、多読のみならず英語学習一般の動機付けとしては弱すぎて、学習者には納得されないと思われる。多読の過程では、英語の語感が養われると同時に、母語との違いなど、母語に対する気づきが頻繁に起きて母語の運用力が増すが、これは多読の副次的な成果である。

多読の第一目標は、読んだ総語数で 100 万語とされ⁽²⁾⁽⁵⁾、

これで入門期を終えることになる。この報告では、多読の到達目標を目的に応じて「拾い読み」ができることとする。

「拾い読み」とは、必要なら読む／不必要なら読み飛ばす判断をする読み方である⁽⁶⁾。もちろん必要なら通読してかまわない。「拾い読み」は、一般には新聞や雑誌を読むときに、理系の研究者なら論文を読む場合に行っている。論文はタイトル、アブストラクト、序論、結果などから構成される。タイトルを読んで終わりとすることもあるが、アブストラクトに進んで、読むべき論文かどうか判断することが多い。読むべき論文は、図とその説明や結論などターゲットとなる箇所を精読する。今の時代「拾い読み」をしないと、情報の洪水に対処することはできない。

4. 多読の基本と注意事項

多読は、興味がある、やさしい、ストーリー性のある、細かく難易度分けされた本を、ジャンルは不問で選んで、楽しく大量に英語のまま読むことを一大特徴とする。多読の基本的な進め方は、きわめて小さなステップでレベルを上げて本を選んでいくことである。

次に、多読における本の取り扱いについて述べる。

(1) 本の選び方

入門レベルでは絵が多い、単語数とページ数の少ない本を、物語では登場人物や場面展開が少ない本を、原作が難しい場合にはやさしく書き直した retold 版を選ぶ。本は、初めは LR&GR から選ぶことが一般的となっている。ここで LR(Leveled Readers) は英語を母語とする幼児～小学生向けにレベル分けされた絵本であり、GR(Graded Readers) は英語学習者向けに、語彙、文法などを制限してグレード分けした本である。LR や母語話者向けの児童書の英語には、英語圏の日常生活や習慣、文化に特有の言葉が使われていて、日本人には分からないことが少なくない。LR&GR、児童書を終えれば、YR(Young Readers)の本、さらに Paperbacks に進むことができるようになる。

(2) 本を読む前に

ジャンル、登場人物と人間関係、状況や場面などを確認する。概要やまえがき、目次がある本は、それらに目を通しておく。訳書があれば先に読んでおいてもよい。

(3) 本を読んでいるときに

分からない単語や文は、読み飛ばすよりも、イラストや文脈に注意するなど、何らかの方法で推測する。この習慣を身につけることはきわめて重要である。辞書は引かないことを原則とするが、一区切りの読みを終えたら、気になる単語の発音と意味を、英英辞典で、慣れないうちは英和辞典で確かめることはかまわない。

推測 (predictions) は、読書に大切な技術であり、「predict」することで、物語の流れ、そして作者が伝えようとしてい

るメッセージをつかみます。predict の練習は、読書に必要な「考えながら読む」という力を伸ばす⁽⁷⁾という。この推測には、単語や文の推測だけでなく、次ページをめくる前の次に展開されるストーリーの推測も含む。

(4) 本を読んだ後に理解度を手短かに確認するとよい。たとえば、内容を短く振り返り、目次を読み直し、ぱらぱらとページをめくってポイントを思い起こす。解説やあとがきを読むなど。

5. 多読の得意・不得意と課題

多読だけで全ての英語力を効率的に獲得することは難しい。これは母語話者であっても、小学校から大学まで、さまざまな母語教育が必須であることから分かる。多読は英語力の核となるリーディング力を習得することを最も得意とし、スピーキング力やライティング力の習得はあまり得意ではない⁽⁸⁾。リスニング力の習得には、発音やリズムなどのプロソディについて固有の訓練が必要である。多読で語彙を増やすことはあまり効果的ではないという報告もある⁽⁹⁾。語彙や文法の知識はすべての言語活動の土台となるので、学校英語等で学んでおくことはきわめて有益である（後述）。

次に多読の課題について述べる。

- ・多読には得意、不得意があることを理解し、他の方法とバランスのとれた実践が求められる。
- ・母語での知的水準と入門期多読での内容の幼稚さとの乖離をいかにして縮めるかという課題がある。LR には読み聞かせの手引きが付いているので、手引きまでやれば大人の立場から読める。なお「絵本は、子どもが自力で全てを理解できるという前提で作られているとは限らず、大人が読み聞かせをして、補足説明を加えて子どもは理解するものだ、という側面もあります」⁽¹⁰⁾ということである。そこで Reading Aloud, Modeled Reading, Shared Reading など、適切な読書指導 Guided Reading が求められている⁽¹¹⁾。
- ・理解度をチェックする必要はないとの主張があるが⁽⁹⁾、読みっぱなしでよいのか。理解度のチェックをやると、読みのハードルは確かに上がるが、LR&GR には、理解度をチェックするページがあるものが多い。Penguin Readers などには Before-, During-, After-reading questions や Exercises, Project work, Essay questions があり、編集者が理解度の確認を疎かにしていないことが分かる。
- ・英語はもはや World Englishes である。英米の出版社の LR&GR に依存するのはほどほどにして、選書には新聞や雑誌など、資料を拡げる取り組みや、日本やアジアの視点からの試みがほしい。

英字新聞や雑誌のなかには、Asahi Weekly, The Japan Times Alpha, NHK のラジオ英語講座、TIME for Kids のように、多読向きに内容がレベル分けされているものがある。これらからは、年齢に相応した知的水準を満たす最新の国内外の情報やさまざまな分野の知識が得られる。記事の音声聞くことができる部分も大きい。また、LR&GR で扱われることの少ない領域（政治・経済、日本の社会・日常生活など）の語彙や、さらに抽象語彙を増やすことができる。日本の記事であれば、予備知識があることが多いので、親しみやすく読みやすい。日本語の訳や注釈が付いている場合もあるが、日

本の事情を説明するとき役立つので、一概に母語を排除することはない。TIME for Kids では、K-1, 2, 3-4, 5-6 の段階別になっているので、自分の読解力が英語圏の基準でどの段階にあるかを知ることができる。

新聞の Comic Strip (Peanuts や Dennis the Menace など) は、単語数が少なく、イラストにより意味を推測でき、日常会話で使えるフレーズが多い。しかも英語圏の人々の考え方や人生の機微、生活、文化が分かる。

また、折り紙や和食、昔話、漫画など日本からの発信型の本にもっと目を向けてよい。

6. 多読と語彙、文法、発音

多読をやれば単語や文法の学習は必要ないとの主張がある⁽¹⁶⁾。しかし、英米の英語教育でも、日本の教育とは内容と方法は異なるが、言うまでもなく、それらの学習は必要とされている。英国には English Language の科目があり、語彙や文法を実践的に学び、SPaG (Spelling, Punctuation and Grammar) test や GCSE がある。米国では Language Arts という科目があつて、その中で語彙と文法も学んでいる。

LR&GR にも単語や文法のページは用意されている。Oxford Bookworms や Penguin Readers など、ほとんどの GR には Glossary があり、単語の意味を易しい英語で確かめることができる。文法では、Oxford Univ. Press の Dominoes には Grammar Check の Activity があり、Helbling Readers には使われる構文の表がある。また Helbling は Grammar & Skills の本も出版している。

LR&GR は、内容だけでなく、語彙と文法のレベルもスモールステップで上げていくように設計されており、これにより語彙が増える、文法の基本が暗示的／明示的に学べる仕組みをとっている。なお、児童書では日常生活を基にしていることが多いので、早い段階から倒置文や仮定法の文が現れることがある。

発音と文法教育については、英国の教育省 (DfE) によって公式に承認され、英語圏を中心に世界中で広く採用されている Jolly Learning のプログラムがある⁽¹²⁾。日本でも民間の教育機関で導入されている。Jolly Learning では楽しく学べる、段階的に編集された絵本と音源、動画が用意されていて、多感覚を用い身体全体を使って学ぶ。Jolly Phonetics では、子どもたちは独自のフォニックスに基づいて読み書きを学ぶ。Jolly Grammar では、Jolly Phonics で習得したスキルを基に文法的知識と語彙を身につけてより高度な読み書き能力を養う。

アメリカの幼児教育でも Guided Reading で Phonemic Awareness (音素認識能力) のスキルを育てている⁽¹¹⁾。

以上のように、日本の多読が、LR&GR の利用の他に、英語圏の教育プログラムから学ぶことは多い。

7. 多読と他の英語学習法との比較

日本には次のような民間の学習プログラムがある。

- ・公文式英語⁽¹³⁾：スモールステップで学習を進める点では多読と共通している。リスニングや文法を重視していること、母語も併せて使うこと、絵本は独自に作成した教材を用いることが大きく異なる。
- ・ラボ・パーティ (Labo Party)⁽¹⁴⁾：音と絵 (CD と絵本は独自に作成)、英語＋母語を大切にして、身体を動かして英語を学ぶ。単語や文法の勉強はしない、聞く・話す

がメインで、読む・書くはほとんどやらない。異なる年齢の交流を重視し、グループ活動としての英語劇やキャンプの他に、海外ホームステイがある。

8. 多読と学校英語等での知識

多読は、単語や語源、英語の歴史、発音や音声学、文法、文章の書き方などの知識と組み合わせることで最大の効果を発揮する。これらの知識は、文脈やトーンを理解をより確かなものにし、正確な読解を可能にさせるので、多読とは別に、これらを意識的に体系的に学ぶ機会を学校英語等で作ることが望ましい。学校英語等で学んだ知識が、多読での自然な気づきとなって実を結ぶことを期待する。

学校英語等では学習者の知的水準に見合う題材を用いることや、学習語彙には生活語彙よりも抽象語彙が多いことが特徴であり、学校英語等の知識は、多読を支援／補完する役割を果たすことができる。以下では、学校英語等で身につける知識とスキルについて述べる。

8.1 単語一般に関する知識

この知識は、個々の単語の意味や文のイメージを推測するために使える⁽¹⁵⁾。

- ・単語の意味は、具体的な意味から比喩的意味、さらに抽象的な意味に広がっていること
- ・単語を作る接頭辞と接尾辞
- ・英語の歴史、ゲルマン系とラテン系、ギリシャ系の語源
- ・日常生活で使うゲルマン系の基本語の知識
- ・さまざまな言語からの借用語
- ・単語の音が象徴しているイメージやフィーリング
- ・同義語・類語、言葉の言い換え

英文では同一の単語を繰り返し用いることを非常に嫌い、同義語・類語を用いて言い換えを頻繁におこなっている。新聞や小説では同一人物の呼称をたびたび言い換える。そこで、ある単語の意味が分からなくても、次にくる文章で同義語・類語を用いていることが多いので、意味を推測できる。

- ・英語の具体動詞と日本語の様態副詞（オノマトペ）
英語では、さまざまな動作や心の動きを、細かく分析した具体動詞で表すことを知っておく。これに対して、日本語では、基本動詞にオノマトペを加えて表現することが多い。たとえば「見る」は *see, look, watch* を使い分けるだけでなく、*glance, stare, gaze, gawk* など用いられる。また会話文では「said 代用語」(*iterated, groaned, exclaimed, moaned, sighed* など)が頻繁に用いられる。「それらの動詞から、話し手が喜んでいるのか、不満なのか、怒っているのか、いらついているのか、感情的になっているのか、打ちのめさされているのか、・・・、を推測することができます」⁽¹⁶⁾。

8.2 発音や音声の知識とスキル

英語では単語の綴りと発音の間に規則性はほとんどないので、発音が分からない単語に何回も出会っているうちに自然に読み方が分かってくる⁽¹⁾ということはない。発音が分からない単語を適当にごまかして読んだり、ローマ字読みをやったりしていると、後から正しい発音を学ぶときに、スピーキングで苦労する。発音は、早い時期に

きちんと学び、通じる発音を習得することが望ましい。発音記号（国際音声記号 IPA）を知っていると、将来他の外国語を学ぶときにとても役に立つ。

なぜ、発音や音声が重要かは、それらが文のイメージ、状況の推測に不可欠であるからである。音声は、活字や絵よりも、人の感情や状態を想像させる力は格段に優れている。たとえば、会話でイントネーションを聞けば、話者の気持やその場の雰囲気を直ちに知ることができる。

プロソディによる音声効果を実感するには、たとえば、Martin Luther King 牧師の “I have a dream” のスピーチを視聴することをお勧めする。このスピーチでは「繰り返し」「対比」「メタファー」などの修辞技法（レトリック）を効果的に使うことで、言葉の力を最大限に引き出し、聴衆に深い印象を与えている。原文を視聴／音読することと、翻訳で読むこと／黙読との間にはきわめて大きな落差があることが分かる。修辞技法には他にも直喩、反語、誇張、対句、倒置などがあり、スピーチ以外でも、文学や広告、日常会話などのさまざまな場面で使われている。

音韻やリズムは物語の流れを整える、単音節語を駆使することは力強い表現を可能にする音声技巧である。絵本、児童書にもそれらを巧みに使って、人物の心情や状況を効果的に表している作品がある⁽¹¹⁾。それらの読解には、正しい発音を習得して音読することが求められる⁽¹⁷⁾。

8.3 文法・語法の知識

文法・語法の学習については、多読に役立つ範囲にとどめるという考え方をとることにする。たとえば、文型には、主語(S)＋動詞(V)の語順があり、動詞には他動詞と自動詞があることを知ることにより。多読では訳読のための五文型を基にした構文解析と語順変換は必要ない。

基本五文型では修飾語句（副詞句、前置詞句）は文を構成する要素として認めないので、文は意味を伝えるうえで、不完全で貧弱なものになってしまう。例文で示す。

「It was a slaty, windy day with specs of snow sliding through the tree. SVC の基本の2文型である。しかしこの基本文 It was a day は文法的には完全だが、実際には何も伝えない。day の前後に修飾語句があつて、初めてその状況がはっきりしてくる。修飾語句の使用によって情報も具体的になり、与える感じも豊かになってくる」⁽¹⁸⁾。

次に、He is in the garden. を例文として文型を考える。

考え方1. in the garden は副詞句であるから文の要素ではないので、第1文型である (SV)。

考え方2. He is では意味をなさないので、in the garden を副詞句(A)とする文型を新たに認める (SVA)。

考え方3. 補語 (C) の概念を拡張して in the garden を副詞的補語（仏語でいう状況補語）とする (SVC)。

考え方4. He is in the garden. の in the garden (副詞句) と He is in good health. の in good health (= healthy, 形容詞句) とは同じ資格の句ではない⁽¹⁹⁾。前者の be は存在の be で文型は SV、後者の be は繫辞の be で文型は SVC であり、両者は異なる働きをしている、という。この解釈でよいか。では、He is in the hole. ⁽²⁰⁾ や I am with you. の場合はどうか。be のコアの意味を考えると、文の意味が物理的空間での存在から抽象的な空間での存在（状態）へと広がっていることが分かる。また He is in love. では、in の空間が心

理的空間に広がっている。すなわち **be** のコアの意味は存在であり、意味が「ある」から「である」に展開していると考えることができる⁽²¹⁾。

上の例文の文型一つをとっても専門家の間で見解の一致が見られないのであるから、英文を五文型に基づいて読解することを教えても混乱を招くだけでなかろうか。

文法の知識は、文の意味やイメージ、状況の理解と推測を助けるものでなければならない。たとえば、**mood** は「法」と訳されているが、日常生活の意味では気分・気持である。**mood** は話者の気持を表すものであるから、読み手は法助動詞や仮定法の知識から、話し手の気持を理解／推測すること、その場の雰囲気を読むことができる。

また冠詞は、その有無、不定冠詞、定冠詞の使い方で、文の意味が微妙に、あるいは大きく異なるものになることから、冠詞の知識は間違いなく読解に必須である。この説明によく引用される文に **I ate (a) chicken.** がある。

学習文法は、以下のような特徴を持つという⁽²²⁾。

- ① 簡潔さ：学習者にとって理解しやすいか
 - ② 実用性：言語活動にどの程度役立つか
 - ③ 首尾一貫性：矛盾なく理論としてまとまっているか
 - ④ 一般性：どれだけの言語事実を説明できるか
- 五文型がこれらの特徴を持っているか、疑問である。

8.4 英語の視点と発想の知識

英語の視点は「場面外視点」で客観的・分析的把握の特徴とする⁽²³⁾。この意味は、英語では文章は、多数の人や物が置かれた場面を想定した上で、場面外（観客席）から俯瞰的に場面全体（舞台）を見て、状況を客観的・分析的に捉えて書かれる、ということである。そこで、人や物の単数／複数や不定冠詞／定冠詞を区別することなどが不可欠になる。語順は、自分も含めて舞台を観客席から見ているので、自分を客観視して、たとえば **I see Mt. Fuji.** のように、主語＋動詞＋目的語となる。

英語の発想は、先に概要または結論、重要なことを述べ、次に詳細または具体的な内容を説明することにある。そこで、文の作成では、誰が、どうであるか、どうなるか、何をどうするかに注目して、まず主語を置き、次に動詞で結論を言い、さらに主格補語／目的語／副詞句を使って具体的な内容を示す。このとき文末に補足情報が次々と追加される。このために関係代名詞節などの修飾語句が後置されることが多い。したがって、英文を英語のまま理解するには、語順通りに読んでいく必要がある。そこで英語では、語順通りに絵を描き付け足すことで、一つの場面の絵を完成させ、舞台を見ることができる。例文：**A boy is sleeping in bed with two dogs.**

8.5 文章の書き方の知識

レポートなどでは英語の発想に基づいてパラグラフライティング（paragraph writing）と呼ばれる書き方を（これは高校英語『論理・表現』で学ぶ）。パラグラフライティングは一パラグラフ＝主題で、最初に主題文、次に支持文、終わりに要約文が来る。そこで主題文に分らない単語があっても、支持文や要約文で推測できる。主題文が分からなくても、支持文で主題が具体例で説明されるので、また要約文で主題文が言い直されるので、一つのパラグラフの内容は掴める。レポートを急いで読む必要が

ある場合には、主題文だけを「拾い読み」をすればよい。

英字新聞を読む場合には、記事の特徴的な書き方を知っておくとよい。記事は、見出し、リード（lead）、本文から構成される。リードに最も重要な情報（結論）を書き、それ以降は重要度の降順に説明していく「逆三角形型」の構文をとっているため、「拾い読み」ができる。

8.6 辞書・辞典・事典の利用

辞書には、英和辞典、英英辞典、シソーラス（thesaurus）、語源辞典、発音辞典、和英辞典、専門用語辞典などがある。事典ではウィキペディアの英語版も使えるようになりたい。辞書は、必要に応じて読みの区切りで、積極的に使うとよい。読解力は究極的には読み手の総合知で決まるからである。辞書を大切にしない習慣のない人は、外国語、母語を問わず、広い言語生活で成長することは難しい。

9. おわりに

「多読三原則」に基づく多読は、リーディング力を身につける効果的な方法であること、学習者のレベルに応じて学習者中心で進めることが大切であることを明らかにした。多読をさらに効果的・効率的に進めるには、他の教育法に学び、学校英語等において多読で活かせる知識とスキルを身につけることが肝要であると考えられる。

参考文献

- (1)NPO 多読：<https://tadoku.org/english/>
- (2)SSS 多読：<https://www.seg.co.jp/sss/>
- (3)D.ベナック：“ベナック先生の愉快な読書法”，p.169，藤原書店（2006）。
- (4)大津由紀夫，他：“学校英語教育は何のため？”，p.62，ひつじ書房（2014）。
- (5)酒井邦英：“快読 100 万語！ペーパーバックへの道”，筑摩書房（2002）。
- (6)立花 隆：“「知」のソフトウェア”，p.19，講談社（1984）。
- (7)リーパー・すみ子：“えほんで楽しむ英語の世界”，p.17，一声社（2003）。
- (8)門田修平，高瀬敦子，川崎真理子：“英語リーディングの認知科学”，p.130，くろしお出版（2021）。
- (9)中田達也，他：“英語学習の科学”，p.18，研究社（2022）。
- (10)林 剛司：“中学英語から始める洋書の世界”，p.182，青春出版（2020）。
- (11)リーパー・すみ子：“アメリカの小学校では絵本で英語を教えている”，径書房（2011）。
- (12)Jolly Learning：<https://jollylearning.com/>
- (13)公文式英語：<https://www.kumon.ne.jp/eigo/index.html>
- (14)ラボ・パーティ：<https://www.labo-party.jp/program/>
- (15)綾 皓二郎：“英語の単語学習における発音と音象徴，語源の重要性”，2018 PC Conference 論文集，pp.143-146(2018)。
- (16)C.ベルトン：“英語は多読が一番！”，p.26，筑摩書房(2008)。
- (17)島根国土：“英語習得の思想と方法”，彩流社（2015）。
- (18)三浦順治：“日本人のための英語入門”，p.32，東京書籍（2021）。
- (19)安井 稔：“英文法総覧”，p.263，p.309，開拓社（2022）。
- (20)池上嘉彦：“（英文法）を考える”，p.18，筑摩書房（1991）。
- (21)田中茂範：“表現英文法”，p.277，コスモビア（2015）。
- (22)西島俊彦：“文型論と英語教育”，四国大学紀要 A46，pp.97-108(2016)。
- (23)熊谷高幸：“「自分カメラ」の日本語「観客カメラ」の英語”，新曜社（2020）。